

尚王朝の栄華

玉陵は、1470 年から 1879 年まで 400 年以上にわたって続いた琉球王国第二尚氏王朝の偉大な記念碑です。沖縄そのものと同様、この王朝は激動の歴史をたどりました。王国を取り巻く強力な国々、中国・日本本土・韓国の影響に翻弄され、琉球王国は繁栄と凋落の時期を経験しました。同時に、琉球の国内では、徐々に中央集権が進んでいました。多くの独立した国々の争いが続いた初期、15 世紀の三山時代と呼ばれる三大勢力の時代を経て、1429 年、第一尚氏のもとに首里城を中心とした統一王国が創設されました。

第一尚氏の最後の王、尚徳は 1469 年に反乱で殺されました。彼は後継者を残さなかったため、王府は尚円を王として選出し、これによって第二尚氏が創設されました。尚円は農民の出身で、金丸（かなまる）と名付けられていましたが、自分自身の才覚によって影響力を強めました。王位に就いていたのは短い期間でしたが、彼は王府に重要な制度的転換をもたらしました。それまでは個々のカリスマ性とリーダーシップが政治的な成功に最も重要な要素であると考えられていましたが、尚円は支配階級の多様な知識と能力を活用し、ともに意思決定することで、王府を効率的な官僚制に変えました。このことは、父に敬意を表して玉陵を建設した息子の尚真が、政治的・経済的に大きな躍進を遂げる足場となりました。

尚真の統治した期間は、「中山の黄金時代」と言われており、これはそのまま琉球王国の黄金時代でもあります。彼の統治下で、王国は長い平和と繁栄の時期を謳歌しました。彼は父が始めた行政と経済の再編成を引き継ぎ、中央集権化を推し進めることで、文化と経済の中心地としての首里の重要性を強化しました。また、彼は多くの記念碑や寺院、御殿、庭園、橋の建設に加え、中国様式による首里城の拡大と美化を指揮し、奨励しました。さらに、那覇の港湾のインフラストラクチャーを改善し、王国の国際貿易は大幅に拡大しました。文芸文化も発達しました。

ノロ（女性祭司）の政治的な重要性を認識していた尚真は、各地の村のノロが、王と最高位の神女である聞得大君によって任命される制度を制定し、ノロが王の意向を反映するようにしました。

尚真は 50 年間統治した後、1526 年に死去しました。歴代の後継者は、1879 年まで、ほぼ 4 世紀にわたって第二尚氏を継承しましたが、誰も尚真ほどの平和、繁栄、文化的功績を成し遂げることはできませんでした。1609 年、琉球王国は徳川幕府の薩摩藩に征服され、中国だけではなく日本へも従属するようになったものの、王は権威を保ち続けました。尚泰の息子であり琉球王国の最後の王だった尚典が 1920 年に玉陵に埋葬され、この陵墓に眠る最後の王族となりましたが、尚家の血統は今でも続いています。